

「ここに入居してから6年になりますが、引っ越しを考えたことはただの一度もありません。日本を離れる日まで、ずっとこの部屋に住むつもりです」

満面の笑顔でそう話すのは、家族4人で六本木ヒルズレジデンスC棟に住むメロディ・ナックレさん。グローバル企業のセールス担当副社長であるメロディさんは、ご主人共々海外出張が多く、生活拠点もアメリカ、ドイツ、イタリア、日本と移してきたが、今ほど快適に暮らせたことはないという。

とはいえ、来日に際してまったく不安がなかったわけではないと、メロディさんは明かす。立ちはじめたのは言葉の壁だ。欧米なら、たとえ現地の言葉が話せなくても、道路標識や商品のパッケージは読むことができるが、日本ではそうはいかない。「言葉に関する不安は、今までで一番大きかったかもしれませんが」。職場環境も生活習慣もがらりと変わる日本での生活に適應できるかどうか心配していたそうだが、蓋を開けてみたら「拍子抜けするほど、なんの問題ありませんでした」と、振り返る。六本木ヒルズレジデンスでは、英語が堪能なフロントス

タッフがあらゆる面から生活をサポートしてくれるし、バイリンガル対応の健康相談室もある。エントランスでは、ドアマンがいつも温かい笑顔で声をかけてくれたおかげで、一家は難なく日本での暮らしに馴染むことができたという。「とにかく人がやさしくて感動しました。何かあった時の対応も迅速ですし、アナウンスも日英2カ国語で流れるので安心です。来日当初、いくつもの物件を見て回ったのですが、ここに決めて本当によかったと思います」

メロディさんが来日したのは東日本大震災発生翌年で、都心には多くの空き物件があった。勤務先に近い渋谷や中目黒方面の物件も見て回り、最後に案内されたのが、この六本木ヒルズレジデンスC棟だった。「周辺環境、建物のクオリティ、間取り、内装……すべてがパーフェクトでした。買い物にも外食にも便利な街中にあるとは思えないほど静かですし、緑も豊か。そして何より安全です。家族が安全に、安心して暮らせる環境は何ものにも代えられません」。万全のセキュリティ体制に加え、建物自体が耐震・耐火性に優れ、防災備蓄倉庫を備えている

点も高く評価している。「それに最近知ったのですが、六本木ヒルズは独自に電気もつくっているそうですね。まさかそこまで、と驚きました」

六本木ヒルズレジデンスは今年築15年を迎えるが、「メンテナンスが行き届いていて、古びた印象はかけらもありません」と、メロディさん。建物の入口にペットの足洗い場も設置されており、2年半前に愛犬のオリバーを迎えてからは、今まで以上にこのレジデンスの快適さを実感している。「家族全員、日本が大好きですが、特に生後2カ月で来日した息子にとっては、ここが故郷という感覚なのでしょう。アメリカに帰省中に、『日本に帰りたい』と言いつつ出すほどなんです」と、苦笑する。

子どもたちはアメリカンスクールに通っているが、日本にいる間は、この国の文化にも親しんでほしいと、メロディさんは考える。今後は親子揃って六本木ヒルズで行われるイベントなどにも参加し、日本の思い出を増やしていくつもりだ。「今は、最近行われた田植えイベントに興味津々。来年は是非参加したいと思っています」



左：六本木ヒルズの屋上庭園で開催される田植えイベントは今年で16回目。日本の伝統的な稲作文化を体験できると人気。右：いつも笑顔のフロントスタッフ。



眼下に緑が広がり、四季折々の景色を楽しめる。桜の時期が特に美しく、家族揃って心待ちにしているという。

30 六本木ヒルズレジデンス

MORI LIVINGへの招待

家族の笑顔と成長を見守る、安心で快適な住環境

上：けやき坂を見下ろす子ども部屋。壁際のオープンラックにお気に入りのおもちゃがズラリと並び。
下：大型収納を備えた開放的なキッチン。すっきり片付いた調理台で、親子でゲームを楽しむことも。



MORI LIVING
ROPPONGI HILLS
RESIDENCE
六本木ヒルズレジデンス

所在地：東京都港区六本木
6丁目12-1～4／アクセス
：六本木駅 徒歩約5分 [地下鉄 日比谷線・大江戸線]、
麻布十番駅 徒歩約9分 [地下鉄南北線・大江戸線]／サ
ービス：24時間フロントサービス（バイリン
ガル対応）、ドアマン＆ポーターサービス、健
康相談室、室内設備メンテナンス（一部有料）、
ハウスキーピング（有料）／備考：トランクル
ーム・駐車場あり（空き状況により利用可、有
料）、ペット可（飼育できるペットに制限あり）、
棟内の「六本木ヒルズスバ」を利用可、ビュ
ーラウンジ、ゲストルームあり（有料）

お問い合わせ：森ビル株式会社 住宅事業部
電話：0120-52-4032 www.moriliving.com

生まれた国が全員違うという国際
的なご一家。2年半前に日本生まれの
愛犬が家族に加わったことで、
日本への愛着がさらに深まった。